

高崎市文化財調査報告書第193集

高崎城XVI遺跡

2003

高崎市教育委員会

序

私たちのまち高崎は、恵まれた交通拠点性を生かし「人・もの・情報・文化の交流拠点都市たかさき」として、さらに、高崎都市圏の「中核都市」として着実な発展を続けてまいりました。

21世紀の始まりという時代の節目に市制施行100周年を超え、成熟した市として、また地方分権の新たな担い手である「特例市」として、元気にまちづくりを進めていきたいと考えているところです。

このような魅力あふれる高崎市には、猛将として知られた井伊直正が戦国期の和田城を利用して築いた高崎城が存在しておりました。この城はその後の城主の安藤重信以降三代の修築により、河川を堀として活用した堅固な城として明治の時代まで残っておりましたが、明治10年に陸軍の建物が建設された際に、天守以下の建物が取り壊されて現在に至っております。

宝永七年の高崎城絵図を拝見いたしますと、国立高崎病院の敷地は、高崎城の北西の堀の部分にあっており、当初より貴重な文化財が発見されることが期待されておりました。この資料が高崎市及び近隣地域の地域史解明のため十分に活用されることを切に願うとともに、発掘調査と報告書刊行に尽力した関係者の方々に深く感謝の意を表し序といたします。

平成16年3月31日

高崎市教育委員会

教育長 砂田 威夫

例 言

- ・本書は国立高崎病院仮設病棟建設に伴って事前調査された高崎城ⅩⅦ遺跡(高崎市遺跡番号379)の発掘調査報告書である。
- ・本遺跡は高崎市高松町36-1に存在する。
- ・発掘調査及び整理は高崎市教育委員会が行った。
- ・本遺跡の発掘調査は平成15年12月18日から平成16年1月31日まで行った。
- ・発掘調査は、黒田晃、高橋純の2名が行った。
- ・本書の編集は黒田晃が行った。
- ・遺物・遺構の写真撮影は黒田晃・高橋純が行った。
- ・基準点測量、遺構平面等はスナガ環境測設株式会社に委託した。
- ・出土した遺物及び各種原図は高崎市教育委員会が保管している。

凡 例

- ・遺構番号は、原則として発掘調査時に付したものを使用した。
- ・遺構挿図中に使用した方位記号は座標北を示す。座標値は国際座標を使用している。
- ・土層注記の色調は、農林省農林水産技術会議事務局 (財) 日本色彩研究所監修「標準土色帳」を使用した。

目 次

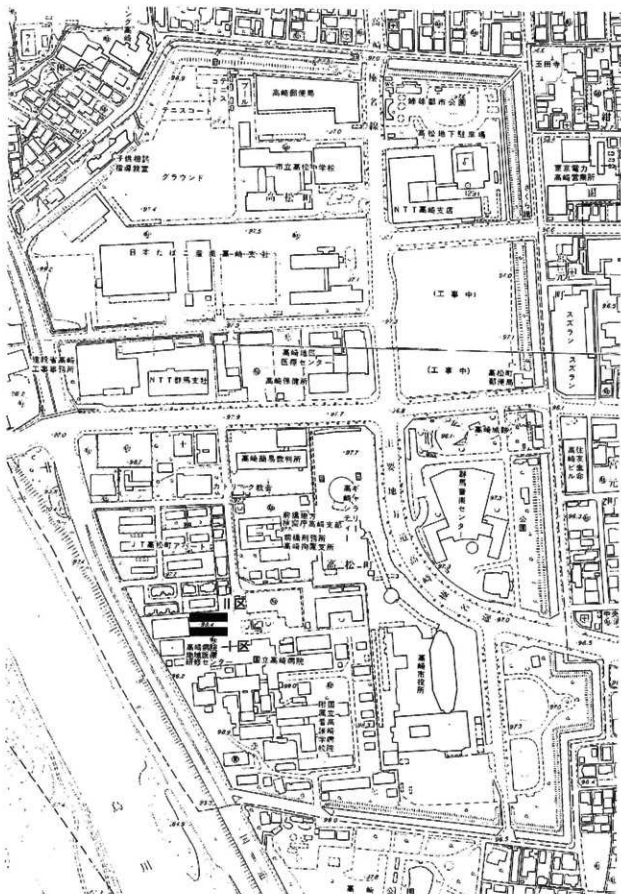
序

例 言 凡 例 目 次

I	遺跡の概要	
1	調査に至る経緯	1
2	発掘調査の方法と経過	1
II	遺跡の位置と環境	
1	遺跡の位置と周辺の地形	2
2	周辺の遺跡	3
III	高崎城ⅩⅦ遺跡の調査	5

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	
第2図	1区・2区平面図	4
第3図	1号建物・2号建物・1号堀エレベーション	5



第1図 遺跡位置図 1/3,600

I 遺跡の概要

1 調査に至る経緯

国立高崎病院では、病棟を改築することが決定し、現在駐車場として利用している西病棟北側の部分に、仮設病棟を建設することが決定した。

高崎市教育委員会文化財保護課では、この計画地が高崎城の範囲内であるため、開発部局と遺跡保存のための協議を重ねた。しかし既に計画変更の可能性は残されていないことから、止むを得ず施設建設予定地について発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなった。

2 発掘調査の方法と経過

調査対象地の広さは、南壁34m、東壁38mでアルファベットのL字型に曲がっている。対象面積は1796㎡である。また、対象敷地内に病院の駐車場の構内であること、及び病棟に遺跡が隣接していることから、対象地を全面的に発掘することは事実上不可能であり、東西方向に長いトレンチを2本設定し調査を行うこととした。南側のトレンチはⅠ区とし、幅4m、長さ22.9m、北側のトレンチはⅡ区で、幅4.3m、長さ22.8mを計測する。このトレンチ内に、世界測地系に即した杭をスナガ環境測定株式会社へ委託して打ち、図面作成の基準とした。

調査対象地の表土除去は重機を使用し、遺構確認作業及び覆土除去作業については人力に拠った。

個別遺構の調査では、土坑等については主軸方向とそれに直行する方向の2本のベルトを残して掘削を行い、土層断面図と遺構平面図を縮尺1/20で作成した。遺物の出土状況など細かな表現が必要なものに関しては1/10の図面も併せて作成した。図面作成においては簡易測り方測量と平板測量、光波測距儀によるドットマップの作成などを併用した。

写真は35mmモノクロ・カラーリバーサルフィルムを用いて担当者が撮影した。

・調査日誌抄

平成15年12月18日	調査開始	調査区周囲に、フェンス設置。Ⅰ区アスファルト除去開始。
平成15年12月19日	Ⅰ区表土掘り下げ	Ⅰ区表土掘り下げ開始。上層には、瓦・レンガ等の混入物が多数散まれ、しまりが悪い。
平成15年12月22日	Ⅱ区表土掘り下げ	地山確認しにくい。一部深掘りトレンチを入れる。表土から40～50cm掘り下げた面から石を入れた掘立柱検出。
平成15年12月24日	Ⅰ区溝・ピット検出	調査区東端に大形の土坑あり。また中央部には石の入った掘立柱建物物が検出されている。
平成15年12月26日	Ⅰ区東掘り下げ	Ⅰ区の東半は上半に土が入りながら深く下がついていることが判明した。
平成16年1月7日	Ⅱ区遺構確認開始	柱穴列は見られるが、土坑はほとんど確認できない。東半には柱穴も存在しない。
平成16年1月13日	Ⅱ区1号堀調査	Ⅱ区の東側に遺構が確認できなかったため、トレンチ等を入れて確認を進めた結果、大形の堀が存在することが判明した。堀は東に連続し、掘立柱より古い。また、Ⅰ区の下にも入り込む。
平成16年1月26日	Ⅱ区平面	Ⅱ区堀の平面図作成。
平成16年1月30日	調査終了	埋め戻し完了発掘調査終了。

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と周辺の地形

高崎城ⅩⅩ遺跡は、高崎市街地の西方1kmの高崎城内に所在する。

高崎市は、関東平野の最奥部に位置し、市の東南部には前橋台地（前橋・高崎台地）と呼ばれる低台地が広がっている。遺跡の西は、烏川の段丘崖となっており、その比高差は10m以上である。

高崎市街地はこの前橋台地上に形成されており、それ以前に築造された高崎城及びその周辺施設も前橋台地上に立地している。

前橋台地は前橋泥流の堆積面に当たる。前橋泥流は浅間山の山体崩壊がその起源とされ、渋川市、前橋市、高崎市、伊勢崎市を結ぶやや崩れた三角形の形状を示しており、その期限はかつて24,000年前とされていたが、前橋市上細井町で泥流下に始良丹沢火山灰層が発見されたことにより、前記の時代よりも新しいことが確認され、群馬郡小野上村では泥流の上位と下位に板鼻褐色軽石群が認められたことから、現在の所約20,000年前の堆積であると考えられている。

この泥流層の下位には前橋砂礫層と呼ばれる、円礫を主体とした砂礫層が100m以上の厚みで堆積している。この砂礫層は、過去の利根川による扇状地堆積物と考えられ、所々に火山砕屑物やシルト層を含む。

本遺跡では関東ローム層は確認されていない。

弥生時代には中期の上器群を含む遺構がいくつか確認されている。特に平成元年の5次調査では、環濠の中央付近で竜見町式土器を伴う方形周溝墓が確認され注目を集めた。

古墳時代以降の遺構としては、高崎城の第3次調査（高崎駅西口線道路建設に伴う発掘調査）において、古墳時代前期の石田川式土器が大量に含まれる土坑が検出されているが、明瞭な集落遺跡は存在しないようである。高崎城関係の調査の成果は以下のとおりである。

- | | |
|--|--|
| 1 昭和60年 高松中学校校舎部分建設
二ノ丸堀の一部を検出、堀の上巾20m、その埋土は堀の内側から黄褐色土と褐色土が互層をなし、土塁を削して内側から埋め立てたことを推察。
報告書「高崎城址」略報パンフレット | 5 平成2年 高崎市役所新庁舎建設
二ノ丸堀検出。
報告書「高崎城三ノ丸遺跡」129集 |
| 2 昭和61年 高松中学校校庭部分建設
堀と堀を結ぶ暗渠の発見。
報告書「高崎城遺跡」第81集 | 6 平成2年 高松郵便局建替
追手門北脇の調査。石組みの側溝検出。
報告書「高崎城Ⅷ（追手門）遺跡」121集 |
| 3 昭和63年 高崎駅西口線道路築造他
坪ノ堀形を取り囲む堀の位置を確認。
及び内部の藩主居館跡調査。
三ノ丸の建物跡検出。
報告書「高崎城Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ」第107集 | 7 平成3年 前橋地方裁判所高崎支部構内建物増築
本丸入り口の小郭、櫓ノ木郭の調査。中世の石積み、井戸等検出
報告書「高崎城櫓ノ木郭遺跡」調査会 |
| 4 平成元年 群馬シンフォニーホール建設
報告書 高崎城Ⅵ「三ノ丸遺跡」104集 | 8 昭和63年 市営高松駐車場・友好姉妹都市公園建設
柱穴内に礎板を持つ大型建物跡検出。
報告書「高松地下駐車場遺跡」114集 |
| | 9 平成5年 都市計画道路高松若松線築造
大河内家の家紋の入った阿磁碗出土
報告書「市内遺跡緊急調査報告書」131集 |

10 平成5年 城址公園便所建設

江戸時代武家屋敷、中世の土坑検出。

報告書「市内遺跡緊急調査報告書」131集

11 平成8年 国立高崎病院研修棟建設

堀検出。

報告書「高崎城址遺跡」調査会

2 周辺の遺跡

遺跡周辺からは旧石器の調査例は無い。高崎市内では大八木町南東、鼻高町少林山台、鼻高町坂上北、大八木町融通寺の4遺跡で石器が出土あるいは採集されているのみである。石器の形態は、全て槍先形尖頭器である。

遺跡周辺には縄文時代の遺跡もあり分布していない。いわゆる観音山丘陵から碓井川対岸の八幡台地など、台地から丘陵にかけて分布の中心はあるが、縄文中期後半以降遺跡数が増加し始めると、高崎台地上の烏川低地帯や井野川沿岸、相馬ヶ原扇状地末端部の舌状台地や微高地、さらには低湿地的な地層状況下になまってしまった土器が出土するような状況となる。

弥生時代の遺跡としては、まず竜見町遺跡を上げることができる。竜見町遺跡は、竪穴住居跡等の遺構は検出されなかったが灰口土・有頸甕が出土し、弥生中期後半の標識遺跡となった。また同じ台地上では稲荷町Ⅰ遺跡・浜尻遺跡から弥生中期後半の住居が発見され、林製作所遺跡・城南小学校校庭遺跡・高崎競馬場遺跡で同じ時期の土器が検出されている。

高崎市内では弥生後期の棒式土器を出土するケースが多いが、遺跡周辺の地域では棒式土器はほとんど見られず、住居も確認されていない。

古墳時代に入ると遺跡数がやや増加するが、周辺には前期古墳は築造されていない。

高崎城Ⅲ遺跡では、土坑内より古墳時代前期石田川式の土器群が出土し、高崎城Ⅴ遺跡では古墳時代後期鬼高式の竪穴住居跡が検出された。

中世になると高崎城築城以前に、烏川崖上に和田氏が居城していた和田城が存在していた。和田城は天正18(1590)年に小田原城とともに落城した。和田城址はその後築造された高崎城に取り込まれていて正確な位置と規模は不明である。この和田城の外郭をなす出城として、下之城・大須城・飯塚城・並板城・倉賀野城などが点在し、城郭の形態をとらない小規模な居館としては浜川地区の居館群、上中居・矢中の館跡群など数多くの存在が知られている。

慶長3(1598)年井伊直政は高崎城を築いて箕輪城から移ってきた。この移城には徳川家康の命があったといわれている。城は和田城を取り込み、本丸・二ノ丸・三ノ丸を圓郭式に配列し、大手門は東向きに開き、箕輪から移した速尺町を大手前に置いて、計画的に城下町を形成した。

高崎城跡はこれまでに大小15地点で発掘調査が行われ、二ノ丸堀や陶磁器など武士の生活用品が多数出土した。二ノ丸堀は幅18m、深さ4mほどで、堀底に埴子堀遺構が確認された。また、赤坂中門土樋下から石製暗渠が発見され、土樋両側の堀は暗渠で結ばれていたことが判明した。

明治維新以降、明治6(1873)年に高崎城全城が陸軍用地となり、東京鎮台高崎分営が設置された。以降軍政の改革に伴って、明治8(1875)年に歩兵第3連隊第1大隊、明治7(1884)年に歩兵第15連隊が設置され、昭和20(1945)年の終戦に至るまで、一貫して日本陸軍の衛戍地であった。

したがって、近代の遺構はそのほとんどが軍隊の遺構であり、その大部分は歩兵第15連隊の遺構である。高崎城・遺跡からは第2兵舎跡・地下壕などの遺構の他、地下壕内よりさまざまな兵器・認識表など、当時の軍隊生活を物語る貴重な資料が数多く出土している。

近世初頭の理工は?

和田城期の坑

一、嘉靖城の碑

1 号掘立柱建物

2号土堀

2号棚立柱建物

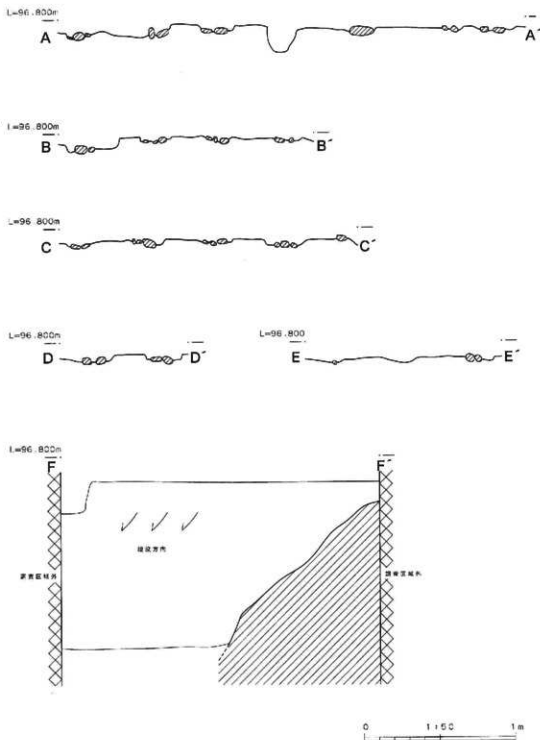
3号掘立柱建物

3号土堤

1 号土堀

2号满

第2图 Ⅰ区·Ⅱ区 平面图 S=1/100



覆土は暗褐色土・シルト・砂の混土であり、南に向かって斜めに堆積している。上位にごぶし大の円礫、径5mmのバミスを多く含む、やや色の濃い層が数条入る。自然堆積ではなく一気に埋め戻した様相であると推定される。なお、東西トレンチでは西へ向かって斜めに堆積していた。

第3図 1・2・3号掘立柱建物、1号堀セクション図 S=1/50

III 高崎城XV遺跡の調査

1 I 区の調査

調査範囲が高崎病院の駐車場内であること、及び高崎市街地に立地していることから近辺に土置き場が確保できないため、全面発掘を避け東西に細長い2本のトレンチを設定し調査を行った。

トレンチは南北に2本並び、南側が南北4m、東西22.9m、北側はやや幅広く南北4.3m、東西22.8mを計測する。南側のトレンチをⅠ区、北側のトレンチをⅡ区と呼称する。

Ⅰ区は西端から表土掘削を行った。当初遺構確認面がどこになるのか釈然としなかったため、やや深めに重機で掘削を行った。重機の届く範囲内ではロームの堆積は確認できず、バミスが混入した円礫及び砂混じりのシルト質土が連続している。

表土より50～70cm程度掘削した地点で、シルトがやや黄味がかった部分があり、ここを遺構検出面とした。

Ⅰ区西端にはほぼ南北方向に連続する溝(1号溝)が存在する。1号溝は幅約40cm、深さ10cm前後であるが4m北側のⅡ区からは検出されていない。溝内からは近世陶磁器片がわずかに出土している。

1号溝に直行する形でやや細長い形の1号土坑が存在する。幅65cm、長さ200cmであり、1号溝よりも古い。遺物の出土は見られなかった。

1号土坑の東には、大型で方形の2号土坑が存在する。確認された南辺は4mを計測し、深さは検出面より約1.3mである。近世から近代の陶磁器類及びレンガの類が出土している。

1号土坑の東には、複数のビットが検出された。これらビット群の中には、等間隔で方形に並び、明らかに建物跡の痕跡を示すもの(1号掘立柱建物)とその内側に建物の認識はできなかったが、深さから見て明らかに柱穴であると推定されるビットが検出された。

1号掘立柱建物は東西方向に6基、南北方向に4基柱穴が確認されている。柱穴の間隔は90～100cmで、深い掘りこみは持たず、確認面から10～20cm掘りくぼめて円礫が5・6個据えられている。

トレンチが小規模であるため建物の全体像は把握しにくい。5.5m検出されている南側柱穴列の南には柱穴は確認されておらず、ここが建物の南限であると推定される。また、南北方向で検出されている柱穴列の東側でも柱穴は確認されておらず、ここが建物の東限と考えることが可能である。更に5.5m連続した柱穴の西側でも柱穴は一切確認されていないことから、東西6間、距離5.5mが建物の東西規模になると推定できる。

Ⅰ区の確認面はこの1号掘立柱建物付近から緩やかに降下し始め、黄色の強いシルト質土もほとんど確認できなくなる。

同時にビット群も数を減らし、Ⅰ区東端では全く認められない。東端部には円形で径2.5m、深さ1.3mの2号土坑が存在している。2号土坑からは近世から近代の瓦片、陶磁器片、レンガなどが多数出土した。

その後Ⅱ区の調査で堀の存在が確認され、Ⅰ区にも連続しているであろうことが予想された。そのため、1号掘立柱建物の下に深堀トレンチを設定し堀の続きを調査したところ、陶磁器片・瓦片などが多く出土し、深い遺構の存在を確認することができた。トレンチ幅に対して遺構の深さが深すぎたため、遺構の底までは確認することはできなかった。また、南側の壁も確認することはできなかった。

2 Ⅱ区の調査

Ⅱ区は北側のトレンチである。Ⅰ区と同様調査区の西側より表土掘削を行ったが、Ⅰ区のように黄色のシルト質土が検出されなかったため、調査区西北端部を重機の届く範囲で深く掘り下げた。その結果、明瞭な面は存在せず、暗褐色の砂混じりシルト質土が連続していることが判明した。

従って、Ⅰ区との連続性を保たせるため、現地表から約70cm掘り下げた部分を仮の遺構検出面として調査を進めた。

調査区中央やや西よりでは、Ⅰ区の1号掘立柱建物と規模や石の入り方の似た2号掘立柱建物と、やや規模が小さく石も抜かれている3号掘立柱建物が検出された。

2号掘立柱建物は、南北方向に4基と東西方向に3基検出された。柱穴の径は約50cmで、検出面から20cm程

度と浅い掘りこみしかもっておらず、ピット内に20cm大の河原石が据えられている。この構造及び規模をⅠ区で検出された1号掘立柱建物と比較してみると、ほぼ一致しており、極めて類似した建物が並列していた可能性を考えることが可能である。なお、2号掘立柱建物で東側に1基のみピットが存在することは、1号掘立柱建物にも共通しており、同じ構造であった可能性が高い。

3号掘立柱建物は、3基検出されており、中に据えられていた石も大部分が抜き取られている。ピットの径は40センチ前後で、掘りこみは10cm程度と浅い。こぶし大の石が数個据えられているが、大部分は除去されており、石の痕跡が瓦痕として残存しているのみであった。この3基以外にピットの展開は確認できなかった。2号掘立柱建物より残存状態が良好ではないことから、より古い遺構となる可能性も考えられる。

この2・3号掘立柱建物を境に、調査区東側ではピット及び土坑の検出ができなくなった。しかし、瓦・陶磁器類の散布が多く見られるため、調査区東端部・中央部・北西隅に深掘りトレンチを設定し遺構検出面以下の状況を詳細に調べることとした。その結果、トレンチ内から瓦・陶磁器類が出土し始め、遺構検出面が地山ではないことが明らかとなった。また東端部のトレンチでは深い溝状の遺構形状が検出された。

溝は南北方向と東西方向が交差しており、南北方向の幅は確認可能であるが、東西方向の幅はトレンチの下で確認不可能であった。また、Ⅰ区のトレンチにこの東西方向の立ち上がりが出てこないか深掘りトレンチを設定してみたが、トレンチ内からは瓦・陶磁器類が出土するのみで、立ち上がりは検出できなかった。

また、溝の深さについては、南北方向のトレンチ北端部文に深掘りサブトレンチを設定し、安全面に注意しながら掘り下げを行った。しかし地表面から3m20cm程度掘り下げた地点で激しい湧水が始まり、そこから下の掘削が不可能となってしまった。

溝の底までは検出できなかったがかなり深い溝であり、東西方向に伸びる溝の南側の立ち上がりはⅠ区トレンチでも確認できなかった。これほど大規模な遺構で、なおかつ混入遺物が近世の瓦及び陶磁器類とすれば、この溝は高崎城の堀であると推定される。従って、1号堀と呼称することとする。

高崎城の周辺遺跡で堀の検出例を確認してみると、地表面から5mから8mで堀底に達しており、当遺跡の1号堀がそれらと同等の規模であったことが伺える。

1号堀の北側に連続している部分の堀幅は5～6mで、西側の壁に約1m幅のテラスが見られる。東側の壁はやや急である。全体的には地表面から2m前後掘り下げた地点で調査を止めているため床面はフラットである。

恐らくは東西方向の堀が太い主流で、南北方向は細い支流であると推定される。残念ながら東西方向の南壁は検出されなかったため堀の規模は明らかではない。

中央部をほぼ南北に断ち割ったセクションで堀の埋まり方を見ると、ベースとなっているのは暗褐色土、シルト、砂の混土であり、所々色の濃い黒褐色の帯が入っている。堆積を見ると、北から南に向かって規則的に堆積しており、上位にはこぶし大の円礫、5mm大のバミスを多く含んでいる。この堆積を見る限り、自然堆積ではなく、人為的な堆積であると推定される。

また、南側の壁では同様の層が東から西に向かって斜めに堆積していた。

Ⅱ区中央部トレンチ、北西隅トレンチでは堀の立ち上がりを確認することはできず、2・3号掘立柱建物下にやや角度を北に振りながら連続していることが伺える。各トレンチでは瓦類・陶磁器類が部分的に検出された。

宝永七(1710)年の高崎城復元図と現在の地図を重ねてみると、調査区の付近は長屋屋敷の南、南中門から外側に続く堀に相当しており、この堀がちょうど調査で検出されたようにL字状に折れ曲がっている。恐らくはこの構造が幕末まで引き継がれ、その後明治時代になって陸軍十五連隊施設を建設する際に大規模な土木工事が行われ、一気に埋められていったものと考えられるのである。

報告書抄録

フリガナ	タカサキジョウジュウロクイセキ
書名	高崎城XVI遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第193集
編・著者名	黒田 晃
編集機関	高崎市教育委員会
編集機関所在地	〒370-8501 群馬県高崎市高松町35-1
発行年月日	2004年3月31日
発行機関	高崎市教育委員会

フリガナ	タカサキジョウジュウロクイセキ						
所収遺跡名	高崎城XVI遺跡						
フリガナ	グンマケンタカサキシタカマツチョウ						
所収遺跡所在地	群馬県高崎市高松町36-1						
市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査開始	調査終了	調査面積	調査原因
102020	379	36° 19' 21"	139° 00' 04"	20031218	20040130	1,796㎡	病棟建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高崎城XVI遺跡	城館跡	江戸時代	堀・掘立柱建物	陶磁器・瓦	
			土坑・溝	陶磁器・瓦	



1号掘立柱建物



2・3号掘立柱建物



1号堀 (西から)



高崎城XVI遺跡全景（東から）



1号堀（東から）

高崎市文化財調査報告書第193集

高崎城XVI遺跡

平成16年3月22日	印刷
平成16年3月31日	発行
編集者	高崎市教育委員会 文化財保護課埋蔵文化財担当
発行者	高崎市教育委員会
印刷所	株式会社 精真社
